

DEMAIN から『種蒔く人』への変容

——小牧近江を中心に——

中村 能盛

(名古屋大学大学院人文学研究科/博士研究員)

1. はじめに.

アンリ・バルビュスのクラルテ運動と、アンリ・ギルポーが編集者となり 1918 年から刊行された非合法の反戦運動雑誌 *DEMAIN* に影響を受けたフランス留学時代の小牧近江は、帰国後に旧友である金子洋文と今野賢三と共に、現在の秋田県秋田市で土崎版『種蒔く人』を創刊して 2021 年で 1 世紀を迎える。『種蒔く人』は日本のプロレタリア文芸雑誌の先駆けと位置付けられ、近現代の日本文学研究者によって様々な知見が見出されてきた。しかし執筆者兼主要編集者であった小牧近江が『種蒔く人』を創刊から終刊迄の間に、クラルテ運動と反戦運動雑誌 *DEMAIN* から受けた影響を『種蒔く人』の誌面へ変容させていった研究は極めて少ない。本稿では上述に関する研究項目について、比較文学の観点から検討することを目的とする。

2. 小牧近江とクラルテ運動.

秋田県の土崎で 1894 に生まれた小牧は、父親の仕事の都合で上京し、カトリック修道会が開学した現在の暁星学園に在学していた。しかし小牧が 10 代半ばの頃、父の海外転勤に伴いフランスへ留学し、現在のパリ第 1 大学に入学した。フランスへ留学した小牧は、自身の中に確固たる思想や信条を抱いておらず、第 1 世界大戦の渦中にあるパリで、日本大使館のアルバイトを行いながら大学生活を過ごしていた。しかし、1914 年にヨーロッパの和平を訴え社会主義運動を行っていた思想家ジャン・ジョレスが狂信的な愛国主義の青年にカフェで暗殺された出来事を聞いた小牧は、大きな衝撃を受けた。

フランスに留学していた間、小牧は 20 世紀のフランス文学史に名を残すアポリネールや、ジュール・ロマンやアンリ・バルビュスなどの作家や思想家と出会っていた。特に 1918 年の秋にアンリ・バルビュスと出会いバルビュスが提唱していたクラルテ運動への共鳴と、同時期にスイスのジュネーブへ赴いた際に非合法の雑誌 *DEMAIN* を入手した出来事が、1918 年に大学を卒業後、日本に帰国して『種蒔く人』創刊の際の大きなライトモチーフとなった¹。

アンリ・バルビュスが提唱したクラルテ運動とは、ロマン・ロランの人道主義に影響を受けた反戦運動活動であり、大学を卒業して帰国を決めた小牧はバルビュスから日本でのクラルテ運動を推奨された。

¹野淵敏・雨宮正衛「<種蒔く人>の形成と問題性」、『秋田文学』、秋田文学社、1967 年 11 月号、pp. 6 - 15.

思想家や文芸家が再び呪われた戦争を繰り返さぬよう、世界的に結び合い国際社会運動や労働運動の一翼となって、つまり“思想のインターナショナル”を結成して、真理のためにお互いに闘おうではないか²。

ジャン・ジョオレスの暗殺を起点として人道主義および反戦運動に興味を抱いていた小牧は、アンリ・バルビュスから思想のインターナショナル形成の協力を承諾した。

3. 雑誌 *DEMAIN* の概略.

『種蒔く人』は雑誌 *DEMAIN* から大きな影響を受けていたことを小牧が証言していたが、具体的に *DEMAIN* はいかなる概念を抱いていた雑誌であったのか³。創刊号にアンリ・ギルボーが記述した序文を確認する。

Demain fait connaître au public tout ce que fait soigneusement la presse: les opinions d'écrivains, d'artistes, de sociologues demeurés des hommes — de variés et abondants documents de toute sorte, que seuls connaissent quelques privilégiés. *Demain* n'est pas une affaire de librairie quelconque. *Demain* sollicite la collaboration de ses lecteurs et demande à ceux-ci de lui adresser les documents de toute nature, propres à intéresser l'ensemble des lecteurs. Tout ce qui concerne la rédaction doit être adressé à M. Henri Guilbeaux, directeur de *Demain*. Tout ce qui concerne l'administration doit être adressé à M. J.-H. Jeheber, éditeur de *Demain*⁴.

『明日』は、新聞が慎重さを伴って口を閉ざす真実を大衆に知らせる。人間性を保つ作家、芸術家、社会学者等の意見と、一部の者だけが知っている様々な分野における多種多様な資料。『明日』は一般書店での販売は行なわない。『明日』は皆様の投稿をお願いしている。そして読者共通の関心と呼ぶ資料をお持ちの方はどのような分野であれ、本誌にお送りいただくこともお願いしている。編集の責任は、全てアンリ・ギルボー、管理責任は、J・H・ジェベルにある。

次に *DEMAIN* の創刊号に掲載された「読者の皆様へ」を確認する。

Nous ferons connaître au public tout ce que laisse ignorer trop souvent presse ainsi que les variés et abondants documents de toute nature, que connaissent seuls quelques privilégiés. Cette entreprise n'est pas une affaire quelconque de librairie et d'édition⁵.

本誌は、多くの場合ジャーナリズムが無視した情報、全分野の多様かつ膨大な資料、一部の者だけが知る真実なども全て大衆に知らせていく予定である。こうした仕事は一般の書店や出版社には出来ない。

² 前掲、p. 13.

³ 日本国内では秋田市立中央図書館明德館と大原社会問題研究所に *Demain* が所蔵されている。

⁴ Henri Guilbeaux, « A nos lecteurs », *Demain*, n°1, 1916, couverture.

⁵ *Ibid.*, avant-propos.

DEMAIN は一般市民の手から手へ、そして郵便を通して入手するという特殊な販売方法を行った雑誌であった。併せて DEMAIN は政治思想よりの雑誌と捉えられがちであるが、既存の書物や作品の内容を再掲載する形式を採り、フランス文学からはロマン・ロラン、ロシア文学からはトルストイ、英文学からはシェイクスピアなど非常に豪華な執筆者が揃い、国境の枠組みを超えた国際的な雑誌であった。

4. 土崎版『種蒔く人』の創刊.

創刊号から最終号の DEMAIN を携えて 1919 年の 12 月に神戸港に到着した小牧は、外務省に勤務し始めるがクラルテ運動を日本に普及させ、DEMAIN の日本版となる機関誌を創刊しようと試み始めた。紆余曲折を経て小牧は自身が発起人となり、同じく秋田出身の文筆家であり映画の活弁士であった今野賢三と、作家の金子洋文に編集協力を依頼して 3 名が中心人物となり、編集室が東京都内でありながらも、通称・土崎版『種蒔く人』が 1921 年 2 月に創刊された。

小牧は創刊当時、故郷である秋田県の土崎には住んでいなかったのにも関わらず、土崎版『種蒔く人』と呼称されていた所以は 2 つの事情が加味されている。1 点目は秋田県に残った今野が郵便で届いた原稿を受け取り、土崎にあった寺林印刷所で印刷したため、発行地は東京であっても印刷地が現在の秋田県秋田市だったということである。もう 1 点は土崎版の創刊号から 3 号までに関しては、小牧の同級生であった金子や今野以外にも、秋田県に在住していた畠山松治郎、近江谷友治、安田養蔵、山川亮といった秋田県出身者、又は秋田県在住者らによって執筆者が構成されていたからであった。土崎版『種蒔く人』の創刊号に掲載された項目は下記の通りである。

土崎版『種蒔く人』創刊号の目次と概要

題名	執筆者	概要
「生存競争と相互扶助論」(評論)	赤帽子(安田養蔵のペンネーム)	ダーウィンの『種の起源』とクロポトキンの『相互扶助論』に基づき、主に貧富について論じた評論。
「無産者と有産者」(評論)	金中生(近江谷友治のペンネーム)	階級社会について論じた評論。
「汽車」(短歌)	※石川啄木(再掲)	今野賢三の方針により、石川啄木の作品を再掲載。
「闘いに行ってみなさい」(詩)	※マルセル・マルチネ(再掲)	小牧近江の方針により、DEMAIN10 号に掲載された詩を抜粋して、再掲載。
「恩知らずの乞食」(評論)	小牧近江	第 2 インターナショナルを批判し、第 3 インターナショナルを称賛した評論。
「貧乏人の涙」(掌編小説)	畠山松治郎	漁夫である主人公が生い立ちを、友人に手紙を通して叙述した掌編。

「チェーホフの『農人』から1」(作品紹介※原題ママ)	金子洋文	ロシア文学のチェーホフが執筆者した『百姓たち』を創刊号から3号にかけて紹介。
「編輯後記」		

創刊号は評論が多く、小説や詩は2作品掲載されているだけであった。2号と3号では、詩や小説の掲載が増えていき、半年後に復刊した通称・東京版『種蒔く人』はページ数も増え、神近市子、秋田雨雀、小川未明、藤森成吉といった近代日本文学者が執筆者として加わり、評論や随筆と同等に小説や詩、そして地方の状況などを記述した地方欄などで誌面が構成され、文芸雑誌としての色合いを強めていった。

そして創刊号で特筆すべき点は *DEMAIN* の10号に掲載されたマルセル・マルチネの詩が、小牧の翻訳を通して日本語訳として掲載されたことであった。

5. *DEMAIN* におけるキリスト教観.

1921年の段階で、仏文学研究室や仏文科を設置していた国内の研究教育機関は東大、慶応大、早大の3大学であり、現在の岩波文庫が創刊されるよりも前の時代に首都圏ではなく地方都市発祥の文芸雑誌にフランス文学作品の翻訳が掲載されていた事象は管見の限り『種蒔く人』のマルセル・マルチネの詩が第一号であり、画期的な出来事であった。マルセル・マルチネの詩である「闘いに行ってみなさい」とはどのような内容なのか。

Les deux poèmes Évangile et Israël, de notre ami Marcel Martinet, publiés dans notre cahier d'août, ont été très remarquables. Nous offrons aujourd'hui à nos lecteurs une nouvelle pièce extraite du recueil que prépare Martinet.

[...]

O pauvre, ouvrier, paysan,

Regarde tes lourdes mains noires,

De tous tes yeux, usés, rougis ;

Regarde tes filles, leurs joues blêmes,

Regarde tes fils, leurs bras maigres,

Regarde leurs cœurs avilis,

Et ta vieille compagne, regarde son visage,

Celui de vos vingt ans,

Et son corps misérable et son âme flétrie ;

Et ceci encor, devant toi,

Regarde la fosse commune,

Tes compagnons, tes père et mère...

Et maintenant, et maintenant

Va te battre ⁶!

我々の友であるマルセル・マルチネによる「イスラエル」と「福音書」の2つの詩が、8月に刊行された際、非常に注目された。今回、マルチネの執筆した新作の選文作品の一部を読者に捧げる。

(中略)

貧しき人、労働者、農民よ、

あなた方の黒く重たい両手を見なさい。

あなた方の赤く、やつれた全ての眼差しで自分たちの娘を、青ざめた頬を。

痩せた腕と墮落した心を持ったあなた方の子供達と

それから昔馴染みの女性の顔と20歳の女性を。

その哀れな身体と傷ついた魂を。

そして依然としてあなたに直面している共同の墓穴、仲間、父そして母を見なさい。

さあ、それでも闘いに行くなら行ってみなさい！

「闘いに行ってみなさい」以外にも、*DEMAIN8*号にはマルセル・マルチネの詩「イスラエル・福音書」が掲載されていた。「イスラエル・福音書」は、土崎版および東京版『種蒔く人』の誌面には日本語訳で掲載されず、今までの先行研究では言及されていなかった。なので、原文の主たるセンテンスを中心に把握したい。

Jérusalem.

Juifs, morts dans les armées,

Tombées dans votre sang sur le sol des patries.

[...]

Notre foi, tu n'as pas voulu

Y oublier ta foi farouche

—Mais la neuve Jérusalem.

Elle est si juste, elle est si belle !

Ah ! vieux railleur impénitent,

Dans la Jérusalem des maîtres

Entres-y, va, sur tes genoux

⁶ Marcel Martinet, « Tu vas te battre... », *Demain*, n°10, 1916, pp.203-207.

Usés depuis des milliers d'ans.

Évangile.

Fils de la loi du Christ, fils de la loi d'amour,

Avez-vous regardé jusqu'au fond de vos cœurs ?

Les raisons des vendeurs du temple,

Les discours des Pharisiens

Ont-ils tout couvert dans votre âme ?

Homme, tu ne tueras point

—Regarde donc la terre—

Homme, tu aimeras ton prochain comme toi-même ⁷.

「イスラエル」

祖国の地で、あなた方の血液は、軍隊に従事し亡くなったユダヤ人に垂れている。

(中略)

あなた方は、我々の信仰を自身の強固な信仰の中で疎かにしなかつたのだ。

けれども真新しいエルサレムは、本当に正義にかなない素晴らしい！

老齢なエルサレムの指導者の中には、悔悟しない冷やかしか好きな人間であり、千年前から消耗した膝の上に向かおうとしている。

「福音書」

あなた方は心の奥底まで、キリストの教えに基づく信徒たちや愛に基づく信徒たちが、見えていたのだろうか？

聖堂の売り主による口実やパリサイ人による演説が、あなた方の魂を覆い隠していなかつたのだろうか？

人間達よ。あなた方はいかなる殺し合いもしないだろう。

だから地上を見なさい。

人間達よ。自分を愛するように隣人を愛しなさい。

⁷ Marcel Martinet, « Israël, Évangile. », *Demain*, n°8, 1916, pp.86-89.

マルセル・マルチネの詩「イスラエル・福音書」には、キリスト教を賛美する内容が掲載されていた。特にマルチネは「自分を愛するように隣人を愛する」はイエス・キリストの一節を、自身の詩の中で引用していた。

名作ジャン・クリストフを書いたフランスの作家ロマン・ロランは反戦運動を行っていたため、編集者アンリ・ギルポーにとっても、そして後に『種蒔く人』を創刊することになった小牧にとっても、理想的な文学者であったがロマン・ロランは *DEMAIN* の誌面に「永遠のアンティゴネ」と題した評論を掲載していた。アンティゴネとは、ギリシャ神話に登場するオイディプス王の娘を題材にした物語で、亡命した兄ポリュケイネスが祖国を責めるも失敗し、兄の亡骸を埋葬しようとするが、叔父クレオンの命令に背いたため、洞窟に入れられ絶望したアンティゴネが自害する悲劇であり、20世紀に入ってから作家ジャン・アヌイとジャン・コクトーが原作を翻案して戯曲化させていた。ロマン・ロランが *DEMAIN* 創刊号に掲載した「永遠のアンティゴネ」と題した評論の中で、下記の一節に着目する。

Ayez la claire vision du devoir fraternel de compassion, d'entr'aide, d'union entre tous les êtres, qui est la loi suprême que s'accordent à prescrire—aux chrétiens, la voix du Christ,—aux esprits libres, la libre raison⁸.

自由な精神と理性で、キリストの声をキリスト教徒へ命じることで意見が一致し、至上の教えを抱く全存在の間に、助け合い、同盟、思いやりなど友愛的な務めについて明晰な視像を抱いてください。

DEMAIN にはキリスト教を賛美する評論も一部、掲載されていたものの、小牧が *DEMAIN* から引用して日本語に翻訳し、土崎版の『種蒔く人』に掲載した詩や評論はマルセル・マルチネの「闘いに行ってみなさい」の一部分だけであった。主要編集者兼執筆者でもあった今野は、土崎版『種蒔く人』の2号に評論である「理想に生きる者」を執筆していたので、内容を確認したい。

イエスは、マリヤたった一人に、あまりの淋しさから、鋭く、ねぢけ、とがつかうところを、やわらげることが出来たのだ。現実にも生きなければならないイエスは、(人として)マリヤを見出したことに依って、その魂に安らかに眠ることが出来たのだ。マリヤの魂に、自分を見出すことが出来たればこそ、『ゲヘナの谷間を通つて死の國』へ行くにも、一切を失つて一切を得る微笑みがあつたに違いない。イエスが若し、マクダラのマリヤを見出さなかつたらどうであろう。(中略)イエスが人として私共の胸に觸れるからこそ、イエスの言葉に權威を見出す。人が人として考へられない神の世界は、私共に更に交渉がない筈だ。私は今、イエスとマリヤの會話を有島さんの『聖餐』から引いた。そして理想と現實に立つてゐる自分の姿を見ながら常に考へさせられてゐることを明らかにしようとするのだ。私ばかりではない。眞實に生きようとする私の最も愛する友は、皆この悩みを抱いて狂はしい思ひをしてゐる筈だ。私はイエスの靴の紐を解くにも足らないものであることを知つてゐ

⁸ Romain Rolland, « A l'antigone éternelle », *Demain*, n°1, 1916, p. 21.

る。が、私は人生の眞實に立たうとして、つねに孤獨を凝視めて來たものだ。私の描く理想の世界は、攔むことの出来ない幻影でなければならなかった。(中略)理想を捨てよと悪魔は囁く。さうすると速坐に幸福になれると囁く。その誘惑にしたがつて、理想の衣をかなぐり捨てたならばどうなるか。私は最も冷やかに考へて、私自身として、決して幸福になれることに気がついた。なぜならば、私の両面は、満たされないからだ。私の良心がやつぱり、どこまで行つても理想を叫ぶであらう。(中略)刹那を追ふてゐる現實主義者の、何と飽氣ない存在だろう⁹。

今野は文豪・有島武郎の弟子であった。有島は札幌独立教会で洗礼を受けた元・クリスチャンであり、後に信仰を捨象していると解釈されている。今野は有島武郎の影響を受けて、『種蒔く人』以前に刊行された秋田の文芸雑誌『生長』に掲載した「をののき」(1917年11月)や、執筆活動の最初期に秋田毎日新聞に掲載した「祭の夜」(1912年6月28日)などの作品にもキリスト教的世界に基づく作品を執筆していた。土崎版『種蒔く人』の主要メンバーの1人である今野はキリスト教的世界観を肯定していたが、小牧はどのようにキリスト教を解釈していたのか。

6. 小牧近江のキリスト教観.

フランスへ留学する前、親の上京に伴いカトリック修道会であるマリア会が開学した現在の暁星学園に在学していた小牧は、生前の自伝に暁星時代の出来事を下記のように回想していた。

学校から「近江谷家満員札止め」の通知があった。その理由は、度重なる月謝滞納からであった。栄之助叔父と私は催促の矢面にたたされた。二人は、それが厭になって、しばしばズル休みをした。私は二年生まで成績は人並みで、国語、ことに作文はほめられたこともあった。語学も嫌いではなかったが、やがて成績がガタ落ちに転落した。栄之助叔父は、先きを見込して郷里に退散した。私はひとりで十字架を背負わされることになった。受難は厳しさを加えた。催促が督促になった。授業中しばしば呼び出された。そのうち会計係の宣教師がフランス語の担当教師になったのは、運のつきであった。この宗教の偽善者は、罪もない十字架少年を名指して露骨にいじめた。“もし私が金持ちだったら、あの別荘を買うだろう。”どうだ近江谷、それをフランス語に訳してご覧、といった具合である。はい、先生、“もし私が金持ちだったら、月謝を払うだろう”と、よっぽど答えてやろうかと思つたが、しょせん“ない袖は振れぬ”のだから、やめにした。しかし敵はいい気になって攻勢にでるのであった。関係代名詞の文例に“金を払わぬトコロノ者は不徳な人間だ”というのがあって、それを仏訳にせよ、と命じられたのには、かっとなった。私は心で泣き、腹の中の虫が、むらむらと憤るのを感じたのであった¹⁰。

⁹ 今野賢三「理想に生きる者」土崎版『種蒔く人』第1巻第2号、種蒔き社、1921年3月15日、pp. 10-11.

¹⁰ 近江谷小牧編『近江谷井堂』1971年、p.135.

小牧は生前に執筆した別の回想録『ある現代史』でも、暁星時代にフランス人修道士から嫌がらせを受けていたことを回想している。小牧は幼少期から青年期にかけて暁星時代に味わった修道士による悲惨な体験がキリスト教に限らず、宗教に対する強烈な嫌悪感を抱かせ、*DEMAIN* に掲載されていたマルセル・マルチネの 3 つの詩の中から『種蒔く人』に日本語訳を掲載する際に宗教色の強い詩ではなく「闘いに行ってみなさい」を日本語に訳して掲載していたと、解釈できる。

土崎版『種蒔く人』には、今野のキリスト教に関する評論が掲載されていたが、土崎版は3号で一旦、終了となり、5ヶ月後の1921年10月に出版地も印刷地も、現在の東京都に移してページ数を増やし小説と地方欄、世界欄をメインとして誌面に掲載した東京版『種蒔く人』が創刊された。土崎版の表紙は金子の希望により、ミレーの絵画を表紙に掲載していたがミレーは19世紀のバルビゾン派と位置付けられ、キリスト教色の強い絵画も描いていた。東京版からは小牧の依頼で柳瀬正夢が表紙のイラストを担当し、*DEMAIN* に描かれた挿絵を模倣したプロレタリアアートの挿絵が表紙に掲載されるようになった。東京版として復活した『種蒔く人』の序文の冒頭には、興味深い一節が掲載されていた。

嘗て人間は神を造った。今や人間は神を殺した。造られたものゝ運命は知るべきである。現代に神はいない。しかも神の變形はいたるところに充満する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである¹¹。

上記の序文は毎号掲載されていた。キリスト教的世界観を作品に取り入れていた今野さえ、東京版『種蒔く人』の誌面に掲載した作品や評論にはキリスト教のみならず広義に宗教的世界観を否定していた。

7. おわりに.

小牧は、編集者アンリ・ギルボーによる非合法の雑誌 *DEMAIN* の概念を模範および手本として『種蒔く人』へ変容させる際、20世紀初頭に始まったロシア革命による共産主義ならびに社会主義こそが世界平和に導く手段であると解釈し、東京版『種蒔く人』の誌面からキリスト教に関する内容を一切排除した。小牧が戦後間もない頃に執筆したいくつかの未刊行原稿はあきた文学資料館に保存されているが、資料を閲覧した限り、小牧は戦後になってもキリスト教に基づく随筆や掌編小説を執筆することはなかった。

青年期の頃にカトリック系ミッション・スクールである暁星での悲惨な体験が、小牧にとって生涯にわたって反宗教を貫かせたのと同時に、東京版『種蒔く人』からは完全に宗教色を捨象した結果、アナーキーな一面をも助長させ、あらゆる分野の随筆や作品を掲載することが可能となり、その後の国内のプロレタリア文芸雑誌に大きな影響を与えることとなったのである。

¹¹ 東京版『種蒔く人』第1巻第1号、種蒔き社、1921年10月3日、目次。

追補・本稿は秋田魁新報の2020年2月3日付の文化面に寄稿した『「種蒔く人」と反宗教』の内容を加筆し、同月に開催された秋田風土文学会での講演内容と総会における各先生方からの御意見を参考としました。

御助言いただきました秋田魁新報社文化部の三戸忠洋様、秋田県立大学の高橋秀晴先生ならびに秋田県立大学名誉教授の佐々木久春先生に厚く御礼申し上げます。